



近世說美少年錄
七編
三



~ 13
3567
33



門 13
號 3567
卷 33

新馬石童子訓卷之十八



東都 曲亭主人人口授編次

一回

偽兵を率て健宗好純を襲ふ
醉夢を驚く良臣玉石を辨む

前回の盤まきりけ。七鹿山の段末を復説大江杜四郎成勝。峯張染六郎通能の二度の窮阨を相脱して長橋倭太郎勢茶象船美弥知量等と俱ふ土地善神を黙禱を果て退治談ざるや。我は是より越路小走らば再度の追隊逼来て難美及ぶ支もやわん。早く路を取替て美濃尾張の方ふか必後安かべ。と叫く成勝と共侶小通能も亦いふや。曩小這山脚の茶博士の不問自語ふ知りぬ。山の山より美濃へ出。捷徑のあるるを。和君等それを知りたる歎と問きて勢茶知量ハ応

新馬石童子訓卷之十八

東都 曲亭主人人口授編次

早稲田 大學 図書館
34.6.3 欠
蔵 書

難々沈吟して吾れも這山を前より過りてとまひれば其美へのまじり
 知りて這里欲那里欲とぞり思難くありけ程小奇ある哉西園の大鹿
 土地の茅社の頭より忽然と走來り敢亦人を怕とぞ這少年等の先小立て
 徐々として行ひゆきも屢後方を見之り我を導く者小似れば成勝蚤
 く意腹小悟りて自餘の三人小叫くや彼正しく神鹿也今我らの為小
 御導を做せぬと云ふと又ハ通能勢泰知量共侶小欲ひ見く寔小
 然々然々下。驚み谷雲の奇異ありて悠云勢泰知量の必死を救ひ
 志目彼鹿もん疑をて後ひゆべ便宜をゆとさうとぞやと俱小鹿の
 少く小任をれば鹿ハ成勝通能等の初來りける山脚の方小下りゆく程十八九
 町左小幽けに細路あり鹿ハ路を左小取てあの細路小入りて成勝通能勢
 泰知量致さるけりと皆あらうとて開き儘従ひゆく程小實小是鳥路熊徑

樹木森然と枝をてて彫形の日光小疎く荆棘離々と伏果りて
 人の脚を捉らまくと實小是一步運ぶも安くと然れども已に小あはれな
 俱小辛くして従ひゆく程小終日小と饑渴を覺て是日申牌過る左側小果
 一之村落小來りけり當下件の西箇の鹿ハこの程小欲在らざりて敢
 亦見るとまひは杖へとむり少年等ハまてく神の祐を感して俱小踵を旋
 らして故來り路を再拜走姑且く長橋勢泰ハ象船知量小向ひてゆ
 ず鹿の里近山小在る者ハ秋田圃を損ふ故小人射て捉るハ利業ある或ハ
 又獵者の野ともいひ山小のむ猪も鹿も射て殺せり第小殺
 生るれども生活るる争何れせん單その人ある者一時の興を取らんて
 人の為小憂を做さる禽獸を射て捉る寔小無益の殺生あり初小已
 ちの美を思つて統袴の暇あ折ハ單郊外小獵消へて鹿を射てその

樂小做たのしみたることあるものを今日けふ料らむ神鹿かみか不ふ必死ひつしの厄やくを救きうてこの
 活路かつろを教しらることある我們われらが果報くわくわくあること大江おほやま峯張みねぢやう兩賢りやうけん兄あにの人ひとの勝かち
 一いつ忠信ちゆうしん孝義かうぎの餘慶よけいあること疑うたがひありこと俱とも不ふ後悔くわくごありことけりこと推おし進しん白はく
三坂巻の六の江の端像小長橋象船西小羊が鹿を刺すを因りてその段勢茶知
賢が後悔の心標を早く写し書一のあつたの神鹿ゆめを看官その用意を思ふ一浩處小
 箇このの杜客とせき前まへ面めんより来きりけりこと通能とんねい急いそ呼よび留とどめて去さることの里さとの名なを問とふこと在あ
あつた客答きやくた只ただ這里この昔むかしより世よの美濃みのと近江おうみの境さかい宿物語しゆくものがたりの里さとありこと
おの捨すてて去さりこと是こゝより成勝なりかち等らの這村この稍盡しやうじん處ところ最寂さいせきなる客店きやくてん小宿せうしゆく
ゆを需もちふ勢せき茶ちやと知量ちりやう程速ほどすみかぬ御士ごしの子兒こゝろの漫まん小出せうしゆて憶おぼれことも猶消なほし
たりといいふ做しらること又成勝なりかち通能とんねい彼等かれらと相識あひあること旅客りやくあつて憶おぼれことも前まへ程行ほど
あ逢あひことと説購せたい一いつ路ろ人にんの相あひこと逆旅ぎやくりよ主人しゆじん等らの疑うたがことひこと然しかし四箇しよの
あ少年せうねんの寂せき寞ぼくなる宿しゆくをゆて外あ合宿あひあの旅客りやくさけりこと絶たつことあつてをあ

く考いふこと俱とも湯浴ゆよく一いつ夕膳ゆふぜんを果はを程ほど小長せうぢやう於四月うしげの天あま多たら既すでにこと日ひ
れ暮くれけりこと當下たうげ成勝なりかち通能とんねいの独燈どくとの下した小坐せうざを占あて治比ちひと住吉ぢゆぢきへ贈くわること紹しやう
ひの書翰しよかんをものして俱とも勤ごん壯ぢやうの財囊さいのうより圓金えんぢん各五兩ごごりやうを平へい之件しけんの書しよ
かん翰かん共とも侶りよ小是せうしを勢せき茶ちや知量ちりやう小與せうよへてこと和殿わてん等ら周防しゆほうへ赴おもひこと小盤せうばん纏ちんることの
ああることも此こゝ少年せうねんの資し小志せうしのといことを勢せき茶ちや知量ちりやうの言ごん訖しやくらこと
あ推おしこと戻もて開ひらき思おもひことかひことも我われ們らも亦また懐なつ小此せうしの貯祿ちよろくあることあつて是こゝ向むかふ
君命きんめいといいふ難なん美びの討うちことを兼かねて俱とも宿所しゆくじよを去さること時尙ときじやう風念ふうねんの隨ずい小
あること歸城きじやう志しがたこと又また金銀きんぎんあつて第一だいいちのたことも人ひとあつてはれと豫よ思おもひ
いらこともあれこと有あること涯へりりを搔か攪かひこと懐なつ小志せうしの是こゝ見みることといことも俱とも
懐を搔か攪かひこと合あひこと牛うし之見みること金かね此こゝ彼等かれら十餘兩じゆじゆりやうあり成勝なりかち通能とんねい是
を見みてこと這少年この等らの遠慮えんりよあること一霎いっしかん時とき感歎かんたんありけりこと開あく中ちゆう成勝なりかちへ又

勢泰も小向ひていふや。和殿等遠は思てありて近は憂を資るまて小各
 盤纏不足といふとも。周防のゆて逗留の程財用竭るべ不便らん我々の
 父兄の恩恵のよりて二三菟の盤纏のり。薄義あれどもあの十金を枉て納
 りぬといふその言の切なる。小通能も云を連り小薦めて已ざれば勢泰と知
 量へ困らく俱小辨ふ小由あり。其五金を受納りて残る五金をかくといふや。
 芳意黙止かこけ六教小従ひなる。這五金めて物足さる。高恩徳美の
 千萬言もて謝をるとも盡しがたり。餘財へ納りて受へくもあはさ
 まへ成勝と通能へ強難て多辯せむ。各金子を合納りて猶自餘談小及ぶ
 程小勢泰と知量へ當國美濃より尾張小出て伊勢路を過りて捷徑
 を索りて住吉小追んとし亦成勝と通能へ是より岐岨路小杖を薦めて
 東國小遊歴せよとて送小去向を定め果て俱小枕小就じたり。然し由

餘波の惜まれて睡らんとする小の程れを勢泰と知量の捨し命を又さ
 小神の祐小懸されても。猶端ある世を不樂て己が往方を思ふ。親小等
 高嶋の高恩を空しく。倘連累の罪小も。誣らるまあん欬と思ふ
 心をいふ小のれ胸の苦し。小衛小刺。多は戦ひの撲傷ありありらん。
 勢泰も知量も腕痛を堪え。俱小師傳の仙丹を唾小解て塗まらる
 小其疼痛拭ふ。立地小愈せり。誠る哉高嶋祖傳の仙丹。同藩の
 朋輩。うらも敢挑々。是を授けむ。この故小その妙薬を以知る者。稀
 ある小勢泰の石見女の怪あるをいふ。知量の弟子。其心操。衆小勝
 て老實ある故小好純。早く先の兩少羊小彼仙丹を授けり。あをもて知
 量へ衛小小指を啖。研し時血え痛を覺るあり。彼仙丹の即切。あ
 せける。同話休題。然る程小成勝通能勢泰知量。夏天早く明る時侯

遠く起て朝飯を果を程小勢恭と知量被籠の襟衫甲の脛肩
 を脱袂て行囊小せり欲する幸小成勝通能の袱小餘りありかばを借
 て色あどを他の兩衣脚衣管笠路次更買合見と各準備整ひかば通
 能則勢恭と共侶小逆旅主人を召よせて房錢を還を程小宿の炊婢かもて
 来ぬる晝の儲の裏飯を各自小く受合りて袂小あつ立きて草鞋穿締らち
 連立てゆくさき遠く尾張小赴く岐路あり建し傍示小分明るどば
 皆共侶小歩を駐りて送小再會を契るの世へ定る雲水の西と東へ別の口
 誼由言語寡く惟々小憐ま袂をぬみ分ちけり安平某生重説彼日觀
 音寺の城内なる高嶋石見小好純の西郭の宿所小今朝も大江峯張
 兩主僕の越路へと辭去り一時石見小他等小為小去歳の秋より預り置
 たる君侯恩賜の兩種なる沙金白布の韓櫃を兩個の奴隷小昇せり早く

本館小仕仕も曾根見五郎平宗玄小對面せり伏する小宗玄の恙あり
 て仕仕もとばえり只得自餘の近習を請ふて則告稟をり守小豫
 知召され臣が宿所小寓居の旅客大江杜四郎成勝峯張栄六郎通
 能へ今朝も越路へ赴くと俱小立去ひて就て去歳の秋九月十五日小
 彼等恩賜の三種へ最忝く受まらるものも旅小あれ携て他郷へ
 赴たがうり異日かり参る志を胎し置ひて然れども彼等が再来ぬる
 多く歳月をを経ぬらんその折志彼三種を寶庫小藏め措き欲を
 所以小持参仕りぬるの爰を覚え上るをといふ小近習のまらぬて軀奥へど
 赴たける介る程小石見小尚との席小居り二小近習の出て来ぬるを俟こと
 約莫半响許るうやめりて件の近習の單奥よりきき来り石見小向ひ
 ていふや和殿の稟され莫の赴途を則守小覚え上り小守の御氣色宜し

かろぞ且宣ふやう。彼大江社四郎峰張米六郎のりひま。我始より石見
 女小命をり。彼考他御立去をり其前日小告よといひ志を石見女へ何と
 たるやん立去りて後小告へ抑亦等閑ありま。況去歳の秋彼少年等小賜
 御物を自由小儘一貽置他考が當城内小在り。時々え上て御吉を伺
 奉る。宛該るふそ亦他考が去り。後押てか一納まを其不敬甚。裕
 と云恰といひ石見女の臆念あるが下。早く宿所小退て後の御沙汰を俟べ
 記者也又彼社四郎米六。我賜のを用や。と貽置たんぬ。今亦就小與ふ
 へ近習等目録小合一受取て遣る。有司小速與へ。と仰らといひたし告るを
 石見女謹と兼て且答稟をやう。御詫畏うも兼りひひ但社四郎米六が今朝
 發足の一條の昨日曾根見五郎平小云云と報一か。既御書小入らんと
 思ひ。小似を等閑のち外を兼ま。りて殆迷惑仕りぬ。又社四郎米六が彼

御物を貽一置んと臣等小意衷を告げひひの僅小昨宵のりたれば
 稟上る小違ふ。目今小賢へ。聊小等閑也。邊の罪を忘ま。る小はつて
 然。と。い。て。身。の。失。を。飾。り。て。陳。し。稟。せ。ふ。あ。ら。む。和。殿。志。の。美。を。あ。ら。ぬ。て
 尙又御沙汰あをを。術よく稟し。ひねか。との。果。を。起。し。り。
 昇一来れ。韓櫃を件の席小合。を。目録と共。侶小彼沙金白布を。箇
 一箇小出。程小自餘の近習も。出。来。り。好。純。小。會。釋。し。始。の。近。習。を。帮。助
 け。東。西。皆。受。取。果。一。か。石。見。女。の。兩。箇。の。奴。隸。小。空。櫃。を。の。り。昇。せ。て。を。就
 宿所小架り来て。妻の長江小云云と君所の首尾を。叫。び。示。せ。長。江。の。額。を。揮
 し。後。の。西。沙。汰。の。左。や。あ。ん。右。や。あ。ん。と。思。ふ。を。慰。難。て。立。ま。り。を。好。純。兼
 小。喚。禁。り。て。本。月。の。の。り。も。き。我。母。大。人。の。祥。月。の。今。日。の。忌。辰。小。下。り。の。墓。参。り
 ま。る。小。思。ひ。ひ。り。の。障。り。を。来。て。守。の。氣。色。宜。が。ね。漫。小。外。出。加。り。渾。家。代

りて参詣せよと猶外目厭やけし轎子とよかめられ伴の老僕を遣さん。
 疾々としそが長江の異説多く退治を身装之時を移さそ衣裳を整へるを
 程小既小亭午のありしが主僕遠く晝餼を果て後門より出てゆく長
 江の伴當の老僕某甲と縁小箇の腰下婢而已兩個の奴隷小轎子を昇せ
 て香華院へ送りけり。介程小高嶋の宿所小主の女房を始め男女多く出盡
 して留守の二個ある婢妾等の侍りし石見の徒然小堪志御高の思ひの
 もあし守の御不審を羨まりしその曾根見宗玄の詭め歎と猜し言ふ
 出さば胆向ふ心堪事と樂まむ風暖は四月の天白秋吹と思ふ身夏思を
 遣難て只獨坐居若葉の暗に夏樹枝庭の笈の音絶て盆池小浮む紅鯉を人
 小押入人を怖れ者をつらるる君臣朋友心隔世の乱とよ如意あり後と獨
 語て訪入るる長江日銷し今日を常より長しと思ひ是日晴時をり

小慌しく来る者ありと見れば是別人あり今朝未明の吟唱大江峯張主僕のを
 小跟乗小伴せよと越路の方遣し若黨勾津字六と奴隷可平むありけり人
 打擲せられ秋頭髪乱と衣も破れて面色も亦平るる俱小喘る聲音も情
 地小靛栗きたり大事とそいふれをいふ石見女驚はる先四下を見かへりて
 且その所以を語れば字六のいふや。御高の大神の仰のまあり小人等曾根見主小
 峰張両客人小俱して七鹿山を踰るを思ひけり小人等曾根見主小
 生拘れ巔の方小牽きよ。説盡されぬ禍鬼起りて大夏及びひる首
 をいへ箇様々々尾ハ示如此々々々長橋傳太郎勢茶と象船筆弥知
 量が君命のり彼山の大江峯張両主僕を舟に捕らえ射ま欲せを惜
 地小機密を告折る又彼曾根見宗玄が隊兵多々従令山路迫小登り
 来て既小闕窺よりより長橋象船両少年の逆心のりて罵りて隊勢を集

捕網て搦捕せしきけしは四箇の少年怒らば堪へず勢を敵の戦ふ程の曾根見の兵勢始に似せ長橋倭太郎勢茶の窮所を討たれて命を喪ひ隊の雑兵と散々死活も知りむらう。その後長橋象船の意を遺る説盡して君の仰違ふこと罪多し而才子を殺さず只是守の御怨を補ひまゝ為る小宗玄が奸虐ある通りと茲及び上は宿念竟る画餅の如く今き妙小家ありて立去る路あり。是まあることわり小長橋象船共侶の千仞の谷身を投て骸の見る見えどあり。夏その折大江峯張のひびく顛末も可平の共侶の其漏れを補ひて相護る者半响許言葉で字六も彼折勢茶知量か死後の照据ふとて渡したる彼鬚の毛と小指の端を懐より搔撈中て開か儘まよまらむせけ。却あ段の條々ハ近く前回の見えれば看官兼知のゆゑも今亦あふ其崖畧を敢り

さることをいふは是等を作者の鶏助筆とて問話休題當下石見ハ好紙の今字六可平等が報を遺るは果て愀然とて嗟歎の堪む又はうらみを解して先勢茶の鬚の毛と知量の小指の端を見つ傍小閣にて思ひ記す。倭太郎等弥の忠義の宿意を果しむるを溪水に論んと小宗玄既小撃れりその隊兵等の免れかて告訴する者さぞある。曾根見の當家の壁臣也且弟伍六郎健宗あり。それゆゑ優言密井の方あり。我今他等小先ならん大江峯張の出處來歴并小倭太郎等弥等の心烈自殺の趣を盡く訴稟さす彼等が為小誣られて我之守の疑ひを棄する度もある。と思ふはせし高めの思ひも守の御不審小より籠居て後の西沙汰を俟折られハ切小御館へ参りかたり。老臣等賀政朝主と一口鬼太夫の俱小忠義の本性也我と心知るれば盡くその毛を



石見お

偽兵

石見お

偽兵

偽兵

偽兵

九

文



石見お好純
ひとり
單身
衆兵を防ぐ

鬼大夫

偽兵

偽兵

石見お好純

文

石見お

偽兵

石見お

偽兵

偽兵

偽兵

九

文

告知りて彼幫助を借来あつて後悔其首の達かごん字六を我為ふ
 多賀王走りのゆゑ七鹿山の顛末を見聞し如く惜地の告よ又可平ハ一口ハ
 使へ其の所字六と同トカベトと臂迫る料紙硯を曳し墨
 磨流を走書筆の杖も牡鹿の角の束の間ハ密書一通を写し果
 して甲乙共小分封トて書簡両箇へ藏めを卒と取りそへ字六と可平ハ
 をあつ勝を扱めて各件の書簡を受取りの遽ハ外面投て出あけ介程
 ぬ石見ハ心の憂遣うかごも勢泰知量両義烈の彼死を惜し餘り
 ある大江峯張両主僕の往方甚麼と想像る四月の天の霧曇り越かこ
 遠の牡鶴幽不渡る聲はけハ不如歸と鳴と歎ハと妻の長江ハ生憎ハ
 香華院よりかへり来む候とみり小日々落て黄昏近くありし時候
 人や来つらん玄関の方ハ呼門聲をあり石見ハ是を聞て折々老僕若

黨奴隷ハ皆ハ盡ハ客を迎へ入あつて然れがと婢女毎を執持ハ
 かごり我のさあて誰ハあると單語ハ應を多々矮屏風ハ掛けけ袴を穿
 つ遠ハ中刀を腰ハ走つ玄関ハ障子を斜辣哩と曳開れハ思ハか
 きた緝捕の雜兵御説きを呼りて左右齊一組ハ找むを石見ハあつ甚
 麼と驚馬はるるを論ハ脚を粟ハ右ハ一丈餘り投退れハ續て競
 ぶ衆兵を右ハ左ハ受駐て息をも衰とぞ投伏ハ怒ハ堪ハ聲高ハ
 若等ハ何人ハ是事ハ仔細を告告知らせ侍品ハ者ハ素を被る法ハ
 ある猶狼籍ハ及ハびハ開ハ儘ハ還えやと敦圍猛ハ疾視ハ武
 術修練の本事ハ懲けん緝捕の雜兵十名ハ只書々と嘯ハ重
 蒐者ハ當下門外ハ留任ハ蓋一箇ハ少年ハ羊の齡ハ十八九ハ
 て眼圓ハ栗の皮ハ面ハ似ハ顔髪ハ角吹ハ思ハ黄牛ハ行勝ハ

らの野袴の下短き戦外套奇物作の両刀の向ても多免組捕の頭入曾
 根見五郎平宗玄の弟と人不知れたる伍六健宗茲ふわりと名告も果ぞ
 我入る。九尺柄の釣鎗を挟まう。睨へてやれ好純無禮のぞと若く家
 寓居の故客大江杜四郎峯張栄六も素是敵の間者ぞ越路へかると
 一か我君他等の討めよと若く怪め。長橋勢泰と弟子象船知量も仰
 付られしけり。勢泰も知量も及て敵の内志し七鹿山の樹下の外観稀
 ろ地方也杜四郎栄六等と密談ふ及ふを。我兄宗玄其機を猜して惜
 地守不請まの隊兵多く従ふ。迹を跟り彼山を搦捕多く欲ま
 小我兄の幸きて惜や敵の流前命空く多し。隊兵毎の頭も蛇
 より脆く殺散されて走りて當城不た。者方僅許稟とより。事分明
 知らして。我身遊伴多し。兄の怨を復え為る再度の討めを請ま

信之隊兵不借一あり。四箇の逆徒を追撃も今其事の創業も若
 目同下不義及逆又我為る寛家の半隻一家の奴們一箇も漏さば塵ふ
 せん為らう。向ひを知らざるや項を伸きて誅戮の刃を受よ。この果ぞ
 好純呵々と冷笑して言鳥洋亮討め呼り。彼大江峯張へ去處来歴分明
 て當初浪華小名も多に峯張通世の兒孫多を當家の故老の知も
 めえ又倭太郎兼弥等俱小忠美のむ性也罪多死主僕を殺さふ忍
 ひを惜地守の御怨を補ま欲ま。若く兄宗玄の善ふ禍一悪を次ふ
 せ。奸虐非道の癖も雑兵も駐催して彼山を遣り来て及て命を失ひ。人
 自業自得ふわ。然れども倭太郎兼弥等守の仰ふ依らざ。宗玄
 并ふその隊兵と擊果。たりけるを。責て一霎時。あ。俱ふ千仞の谷
 底へ身を投捨て亡絶と注進の者あり。此。這里へ。

のふちや。當家小人の多し。健宗若の遠伴也。まど仕へざる者あり。あるふ
 兄宗玄小習へ。秋雜兵を誘へ。來て當家の故老を撃つ。罪及逆
 小異あり。尚速に退かざる。搦捕て御館へ牽入。後悔せざる。罵れ。健宗怒て左右
 を見たり。兵每那奴の腮暗せ。搦捕せ。組伏せ。と聲苛立て。働ませざる。雜
 兵等。好純の始の本事。鬼胎を抱ひて。忠告する。と。逃巡へ。又我む者あり。と。ひ
 と。健宗。焦燥て持。鎗の輕を尾辣哩と振落して。見たり。石見を刺し
 と。連り。術を盡せざる。好純。敢物。と。右。左。小遣。違。鎗の煙。卷。丁。と
 令。修練。神速。無雙。の。刺。健宗。の。奪。り。と。力。を。涯。小。曳。く。程。小。石。見。小
 へ。見。せ。鎗。の。鋒。頭。を。抜。合。り。後。方。逃。不。投。捨。れ。健宗。慌。て。お。巧。惜。や
 と。七。の。柄。を。棄。て。批。蕩。る。を。好。純。噪。が。左。小。受。て。宛。狗。兎。を。滾。を。似。く。
 項。髮。合。て。採。介。を。起。ん。と。蠱。く。程。一。も。あ。る。を。登。蒐。り。組。布。を。生。捕。ま。く

欲を。不用意。小。捕。縛。る。ひ。と。連。り。小。聲。を。震。立。て。婢。女。毎。の
 奥。中。在。る。を。疾。索。を。も。て。來。志。と。叫。び。亦。健宗。も。最。苦。一。げ。る。聲
 立。く。兵。每。我。を。救。り。と。見。て。を。と。欵。と。怨。む。れ。雜。兵。等。の。一。句。小
 恥。を。知。る。者。兩。三。名。應。と。答。て。走。蒐。り。推。介。先。を。聞。く。を。好。純。此。も。一。を
 け。健宗。を。膝。の。下。小。組。布。を。左。右。の。手。を。拵。る。雜。兵。を。或。へ。中
 躬。累。ひ。投。り。と。白。打。の。術。を。盡。せ。又。我。む。者。あり。と。組。布。れ。健
 宗。へ。聊。甘。を。ひ。て。け。腰。を。短。刀。抜。せ。好。純。の。太。股。を。又。尖。深。く。鬮。熟
 と。刺。と。好。純。痛。癢。由。梳。ぬ。身。單。小。と。多。か。敵。小。勝。を。取。と。か。け。れ。ば
 只。得。中。の。技。内。り。と。亦。復。逆。に。雜。兵。を。殺。拂。ひ。打。散。と。奴。を。刃。を。健
 宗。の。右。の。腕。小。衝。立。れ。健宗。の。呀。と。叫。び。て。反。返。せ。逆。放。背。力。も。多。く。簀。子。を
 かけ。縫。れ。小。け。ん。流。と。鮮。血。共。侶。小。握。持。す。短。刀。の。柄。を。放。ち。弱。り。を。雜

兵等ハ猶救んとて競ハ蒐れる程ありあつたを突然とて外面より走り来る
一箇の武士あり後方小續ク伴當等が黄昏過だするに挑灯十名捕縛持
るもありて主従都て十餘名高嶋の宿所ある玄關陝しと稠入りける
中小伴の武士持る十名をうち振て健宗の隊の雜兵を捷懲しつて登
高やう小若等ハ是野武士組ある游兵小あつたが先度小懲を健宗ハ
哄誘されくも狼籍非法今ハも饒一かたり這乱虐を鎮ん為小一
口鬼太夫安陪がまづら来はるを知らざるやと名告小驚ク雜兵等の吐嗟と
むくり身を縮まりて一團ゆぞありあける其間小石見又ハ健宗の腕小衝立
る刃を抜るを柄小携りて刃を起し徐々二三尺の程退はる痛瘻を敢
物をもせと鬼太夫小ち向ひ下折る小安倍主衛小家僕可平をも告
ける一義を告ぐ一欵と問ハ鬼太夫然ハと七鹿山の由度ハ曾根見五郎平

小従ふて彼山小赴はる野武士の游兵等がかり来て訴稟をふよりて知る
のうら彼をり長橋倭太郎と象船兼弥の自殺のうらまを告ぐはる
ありける小和殿も亦逸早く使札をもて告げをされ事の實をばはる
先々賀殿小面談して非如夜を犯さる館ハばえ上ると思ふ折る人ハ
りて曾根見五郎健宗が兄の怨を復さんて游兵等を哄誘へて和殿を
襲ハ撃まきと告ぐふらち驚死てその非義を鎮ん為小隊兵を將て来ハ
ける小果して乱妨茲及びて和殿痛瘻を買ひハ驚死思ふ所ハ伍六
ハ素是遊伴也とまご仕さる身をかり見せ仇ある人をも仇と一怨
とて恣小守の游兵を従へて事殺伐及びハ罪及逆小等がかるべし
兵毎早く門戸を閉て健宗小従ひ来り游兵等を逃まざるに數珠
繫ふして牽居よととつて健宗の腕小衝立る石見又の中刀

をなまきり抜合りの血を拭ふて主の返せ石見の汗が儘靴小飲る程小
 健宗の疼痛を忍びて身を起し逃まきくを鬼大夫透さむ被捉へて袂
 小きる捕縄もて匣々纏ふて結扭りける。當下石見の好純の鬼大夫が公道
 ある早速の計ひを飲ひ謝して且健宗が乱虐ある事の顛末箇様々と
 詞急迫しく報る折る。妻の長江の香華院より只今如の来れば這
 禍事を皆知りて老僕腰下婢奴隷まで留守せし西箇の婢妾等々之
 皆玄閑不走りゆき。安否を問ひぬ。勲も又彼奴隷可平の鬼大夫の従ふて
 既小立加うしより。ちとく玄閑不登りて主を自成て居り。石見の列
 列と那方這方を見加りてあつ漫あり。婢女毎長江も亦あつ列
 好純浅痕を負ふると婦女子們小抱せられあつ恥辱あるを知ら
 せや。老僕号もちと加。奴隷毎と共侶不退りて奥と後門を守ること

緊要ある疾々立ねと叱り。婢妾們と共侶の老僕奴隷も唯々とちと
 小只得奥へ退りける。汗が中長江の良人の向ひて喃我夫其疾窮所
 あつとちと捨措ぬり。かろえ。この禍事をばりより。奴家先仙丹を
 合せぬ。茲ふ在り。是もて療治せぬとや。この壺をとり抗まへ石見の
 領に開き當要のものあるを言ふ紛れて忘れり。一口主饒しあつとちと
 此も顔を皺めり脚を伸しく穿る袴を褰れば安倍長江可平もあつ創
 めて其刺瘡を見つ眉根を埋昇る長江の痛きと思ふあつを鬼小
 して壺の丹藥會き。良人小飲て裏服ある。痕小布く者數回懐小
 あつける。白麻の汗巾を探り中つ両箇小裂て結合せ件の疾小纏つ
 楚と結留れ。今小ちめ。藥の即功石見の死小疼痛を覺せあつ小
 け袴の下を延し。ちと膝を折布け。長江の歡び小もあつ。鬼大夫

幾感歎して豫めたる高嶋の仙丹奇效神妙なる哉主人起居小障りあり
く轎子小うち乗て咱等と俱に御館へ参りて七鹿山の一條を蚤く訴へ
ぬるぞの恐く婦言行とて彼罪候を以の解にがげん。りりもあらんこゝ
が。曾根見宗玄健宗の窓井の方の弟あるを敵も取ての剛物あるべし吉
語の言を先をそれ人を征し。後時征せらる。苦痛を忍びてを訴あ
らば年来曾根見小婿たるける小人們の胆を冷えん。這談甚廢と真實立
てあつたれば石見及びの葉介とらち笑てそち然あるべん。臣等今
朝仕の事。箇様々あるりあり守の御氣色宜かき宿所へ退りて
後の御沙汰を候と仰出され。他を憚り折る小縦非常の訴あり
とも。参らば倒罪にがま。所為あるを。鬼大夫の訴あり。其
其の障りあるべし。這回和殿の訴。守の御疑ハ氷解。曾根見宗

玄健宗の奸虐早く知られ。和殿推参。その御外ありあるべ
く。安倍同道仕らん。準備を急にぬねと諭せ。石見及び再談。及つた
あつた。芳意に任ん。長江の奥へ退りて我両刀と衣裳をわね。
衣脱更んと中刀を衝立。身を起。鬼大夫急に推禁。仙丹即
功あり。目今運動ある。異日平愈の障りある。あつて脱更の
か。といふ。間小妻の長江の薬の壺を携へ。奥へ退りける程。もあ
らば。腰下婢等。長江と俱に主の両刀夾衣麻の社。祢廣蓋。載て玄関。小
もて来る程。小老僕。今日長江が乗。轎子の背門。あり。志を。両箇の奴
隷。小出。早。せ。玄関。立集。挑灯。その他。東西。準備。小
脱。落。り。既。腰下婢等。長江と俱に主を扶。け。衣。被。ま。く
志。程。小。忽。地。外。面。人。あり。連。り。小。門。を。敲。く。小。老。僕。奴。隷。等。訝



三不童子言卷一ノ

十六

文藝堂出版



まごころの方

めいさく

作者曰ふの段四月上旬
さねの婦人の衣裳は夜小
提帶するを猶春風の如く
あつた婦人の為小春て
筆小仕あり



窓井の方
泣て
憂苦を訴ふ

たかより

三不童子言卷一ノ

文藝堂出版

りて誰やと問へば其人答て否厭し死者ありあはむと賀典膳政朝へと名
 告ふ驚く好純安倍思ひかけたまふ賀主政疾々内へ入れしめせし
 とのふ老僕ありて外へ向ひて賀大人小稟侍る主人屏居
 の折るふ一口主小搦捕れし罪人等もはる累受御免といひくも角
 門を颯と開けし政朝へさもそと応て馳找入る前後小従ふ伴當等が
 照を挑灯暗かぬ道を守る家臣ふいふと都て聴きさう高嶋の若
 黨字六も俱せらしてかへり来る衆皆内へ入果まはる老僕へ鮫角門を閉
 て背門の方小退はる一口の伏兵毎へ健宗并小游兵を一團小牽居て
 跪居て政朝を迎へり當下石見女鬼大夫の遠く席を譲りて夜陰
 の来臨を勞らば政朝是をばあはむと否故意棄るふあはむと目今仕
 かへさる貴所の門前を過るふより悄地小面談せまはるて驚りたまは

るさへ一口生も這處めて回會へ便宜之然ども這里の端近なれば閑
 談小耳かきとといふ石見女あはるて忽地聲高かり奴婢等を召て
 客房小燭台をさしつら卒とむり小稍身を起して案内をされし政朝へ
 鬼大夫小會釋して俱小客房小赴けし看茶の禮事果て政朝膝を找
 めり石見女小向ひていふや。衛小の家僕字六をもて七鹿山の凶変を告
 めこれれふうち驚き証人なれば字六をも俱して速小仕のをり七鹿山よ
 り逃かりし游兵等の訴ありそのゆ所大槩違ひは但長橋象船の
 自殺を他等へ知らざる而已是ふより當番の有司小先示談して臣等則
 君侯小見参を請まりて件の事の趣を備小言上し加へ君侯うち驚
 死ぬて我昨日倭太郎兼弥小仰て彼杜四郎と米六を射て捕れとて悄
 地小路次小遣りたるその事の錯れども五郎平が隊兵を將て迹を

跟々追逼りて反て敗れを取りしと云其美の思ひかひるたまは他等が送ふ
 行ふ所執を忠執と不忠といふはら分列志が他等三名その折命を
 隕したれかこの美甚摩と問ひか臣等答言最憚りある言
 ろる君只曾根見宗玄の詭を信させのひて彼大江杜四郎峯張采六郎
 等を疑ひのひて敵の回者あべしと思食する故有斯異変の心来ひ
 せども臣等も彼疑ひのたゆもいそ近曾誰いといふく彼大江峯張兩
 主僕へ朝倉家の回者也當家の隙を窺ふといふ流言耳入りか臣
 等情地小思ふから彼大江峯張の當初浪華小名も峯張九四藏の兄
 孫也高嶋石見小由縁ありより我も彼知る所とそが忠慮の錯りぬと今日
 北地小相仕へて回者ありたる状その美へいさし知るべきを要あそわれと尋
 思をきつその折腹心の者をもて情地小浪華へ遣して彼来歴を撈らせし

小其者今日かり来て那里の便宜を告るから小可浪華小赴て彼来歴
 を穿鑿する大江峯張兩主僕を知り者少からむ彼少年等七月の時
 候まて住吉の里近江五林寺小寓居のり八月小至りて武者修行の爲俱
 小住吉を立ち去りて一霎時京師小旅宿をき近江の方小赴地といふ風聲
 這里へも吹えりといふその言疑ふべしあざれば更小五林寺を敲く小及
 びが則里の故老等小證書一通を写せし罷りひひ死して臣等小見せざる
 者茲小あり是御覽せよと懐より取出て呈圖をてければ君侯列々齋を
 愀然とて宜ふから我思浅くして宗玄の証言を曉らむ可惜忠義の倭
 太郎兼弥を非命小殺さし不便さよ然る由杜四郎采六を我を
 怨てり御毎小不明不仁の君とて必小説示せせん取しきよとをり
 小御嘆息の外ありを臣等慰め稟をき彼杜四郎采六を温潤

小く學術あれが寡言謹慎の本性にて人の悪をいへぐもいひぞ。その先ハ御
 心安るべしと諭し稟せし領地ありて去歲の九月彼少年等ハ我取りを
 する二種を他等ハ受て實ハ受を當所を立去る今日及びて石見ハをもて
 返納し我菲徳を厭ふるんを曉らむと云云と石見ハを詰りしハ
 我らも鈍まかり死と御後悔の色見えて又宣ふや。今日ハ既ハ黄昏より
 明日ハ風吹て正廳にて訴人等を召集合て言の虚實を詮議せんをれり日
 猶急ぐべし今より彼七鹿山ハ實檢使を遣して宗玄以下の七駭を各其宅
 眷ハ執措せよ。あの餘のふの云云と仰示させぬ折々窓井の方の使ハ
 へ奥より一箇の女の童が君侯の邊へまゐりて何事やん叫ぶ稟事ハ
 へ退りしと云ふの密話猶多ければ是より卷を更めて又下回ハ解らん。

新局玉石童子訓卷之十八終

